Barack Obama

バラク・オバマ 第44代アメリカ合衆国大統領

米国大使館レファレンス資料室／アメリカンセンター・レファレンス資料室

自らの言葉で語る

バラク・オバマは、2008年5月25日、コネティカット州ミドルタウンのウェスリアン大学の卒業式で祝辞を述べた。以下はその抜粋である。この中で彼は、「自分自身を超えた世界に気付き始めた」時期のこと、そして変革をもたらす者になりたいという自らの思いについて語っている。

私は、南アフリカ共和国のアパルトヘイト（人種隔離）制度に反対する運動に積極的に参加するようになりました。また、貧困や医療に関する米国内での論争に興味を持つようにもなりました。そして、大学を卒業するころには、変革をもたらすために草の根レベルで活動をするという、常軌を逸した考えに取りつかれていました。

思い付く限りの国内の団体に手紙を書いたところ、ある日、シカゴのサウスサイドにある小規模な教会グループから、製鉄所の閉鎖で荒廃した地域で地域社会活動家の仕事をしないかという申し出がありました。母と祖父母は私が法科大学院に進学することを望んでいましたし、友人たちはウォール街で就職活動をしていました。それに対し、この団体が私に提示した条件は、年俸1万2000ドルと、おんぼろの中古車を買うための2000ドルというものでした。それでも、私はその条件を受け入れたのです。

しかし、私はシカゴに1人の知り合いもなく、地域社会活動家という仕事の内容についてもよく知りませんでした。私はそれまで、公民権運動やJFK（ジョン・F・ケネディ大統領）の国家への奉仕を求める演説に強く心を動かされていましたが、実際にサウスサイドに行ってみると、デモ行進もなく、気持ちを高揚させる演説もなく、空っぽになった製鉄所の陰で生活に苦しむ大勢の人たちがいるだけでした。そして当初は、私たちの仕事は、あまりうまくいきませんでした。

今でも覚えている出来事があります。地域のリーダーたちと、ギャングの暴力について話し合う会合を開催し始めて間もなく、いつまでたっても人が集まらないことがありました。待ちくたびれたころに、老人のグループが会場に入ってきて席についたのです。そして年老いたご婦人の1人が手を挙げて、こう聞いたのです。「ビンゴゲームの会場はここですか」と。

活動は容易ではありませんでしたが、やがて少しずつ前進していきました。1日ごとに、1ブロックごとに、地域社会を結束させ、新しい有権者を登録させ、放課後のプログラムをつくり、新たな雇用のために戦い、住民がある程度の尊厳を持って暮らすことができるよう支援しました。

一方で、私がしていることは、人々を助けることだけではないということにも気付き始めていました。奉仕を通じて、私を受け入れてくれる地域社会を見つけ、市民としての意義ある活動、そして私が探していた方向性を見つけたのです。奉仕を通じて、私は、自分の一風変わった人生の物語が、より大きな米国の物語にぴったり収まっていることが分かったのです。

Barack Obama

バラク・オバマ 第44代アメリカ合衆国大統領

目　次

バラク・オバマの半生 …… 2
オバマ大統領の将来へのビジョン …… 10
オバマ大統領の家族 …… 12
ジョゼフ・バイデン副大統領 …… 14

バラク・オバマの半生

特異な経歴を持つバラク・オバマが米国大統領に選出されたことで、米国政治の新たな１章が開かれた。

米国史上初のアフリカ系米国人の大統領となったオバマ大統領の半生は、過去のどの米国指導者とも異なっている。ケニア人の父と米国のハートランド（保守的な地域）出身の白人の母という異なる人種の両親を持つオバマは、2004年の民主党全国大会で行った基調演説が好評を博して、一躍全米にその名を知られるようになり、同年イリノイ州から連邦上院議員に選出された。それからわずか4年後、多くの有力候補を抑えて民主党大統領候補に指名され、さらに本選で共和党候補ジョン・マケイン上院議員を破って、米国大統領に当選した。

洗練された語り口と聴衆に強く訴えかける高揚感のある話術、そして若い有権者を熱狂させる能力を兼ね備えたオバマは、選挙運動の手段としてインターネットを巧みに活用するなど、まさに21世紀型の候補者だった。そして、ワシントンの伝統的な国家の運営手法を変えること、多様な思想的・社会的・人種的背景を持つ米国民を共通の利益のために団結させることの２点を、選挙戦の包括的なテーマとして重視した。

オバマは、2004年の民主党全国大会での演説で、「リベラルなアメリカも保守的なアメリカもありません。あるのはアメリカ合衆国だけです。黒人のアメリカも白人のアメリカもラテン系のアメリカもアジア系のアメリカもありません。あるのはアメリカ合衆国だけです。（中略）われわれは

母アン・ダナムに抱かれた幼いころのオバマ（1963年ころ）

インドネシアで母、継父のロロ・ソエトロ、異父妹のマヤと（オバマ9歳）

ケニア人の父バラク・オバマ・シニアと（オバマ10歳）

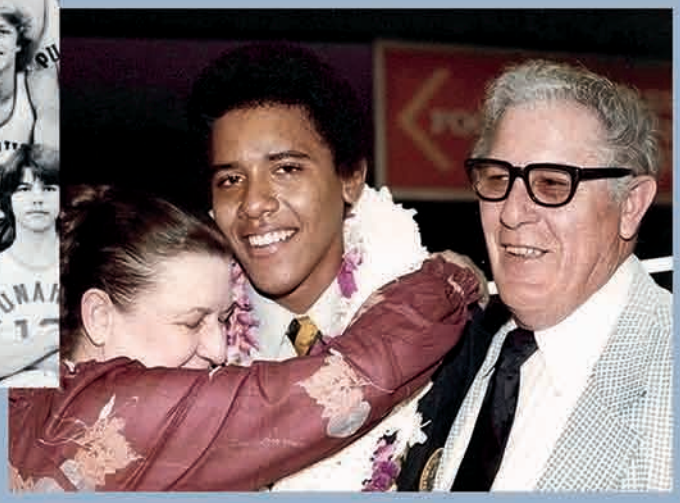
ひとつの国民であり、誰もが星条旗に忠誠を誓い、誰もがアメリカ合衆国を守っているのです」と述べた。

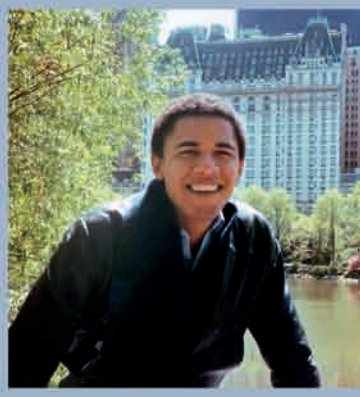
青少年期

オバマの両親は、それぞれ大きく異なる環境で育った。母アン・ダナムは、カンザス州の小さな町で生まれ育った。家族と共にハワイ諸島に引っ越した後、ハワイ大学に留学していたケニア人奨学生バラク・オバマ・シニアと出会った。2人は1959年に結婚し、1961年8月4日、ホノルルでバラク・オバマ・ジュニアが生まれた。その2年後、オバマ・シニアは家族をハワイに残してハーバード大学大学院で学び、その後ケニアに帰国して政府のエコノミストとなった。オバマ少年が父親と再会したのは、10歳のとき、ただ1度だけであった。

オバマが6歳のとき、母親がインドネシア人の石油会社重役と再婚した。一家はインドネシアに移住し、オバマは4年間、首都ジャカルタの学校で学んだ。その後彼はハワイに戻り、母方の祖父母のもとで高校に通った。

オバマは、初めての著書「Dreams from My Father（邦題：マイ・ドリーム）」で、人生のこの時期について、当時米国ではまだ比較的珍しかった、異人種間の血を引いていることの意味を理解できずに悩み、思春期の不安を普通の青年以上に抱えていた、と書いている。何年も後に彼は、さまざまな考え方を理解する広い視野を政治に取り入れたが、黒人文化と白人文化の両方に根差していることが、こうした視野の形成に役立ったのかもしれない。





ハワイの高校では
2軍バスケット・チームに所属
（写真中央、1977年）

祖父スタンレー・アーマー・ダナム、
祖母マデリン・ペインと共に高校卒業を祝う
（1979年）

ニューヨークの
コロンビア大学在学中の
オバマ（1983年ころ）

法科大学院でオバマの同級生だったカサンドラ・バッツは、ニューヨーカー誌のライターであるラリサ・マクファーカーにこう語っている。「バラクには、一見矛盾する複数の事実を統合して、首尾一貫したものにする驚異的な能力がありました。その原点は、家庭では白人に養育される一方で、外の世界に出れば黒人として見られる、というところにあったのでしょう」

オバマは、ハワイを離れて、ロサンゼルスのオクシデンタル・カレッジに2年間通った。後にニューヨークに移り、1983年にコロンビア大学で学士号を取得した。2008年に行った演説で、彼は当時の自分の思考を振り返り、「（前略）大学を卒業するころには、変革をもたらすために草の根レベルで活動するという、常軌を逸した考えに取りつかれていました」と語っている。

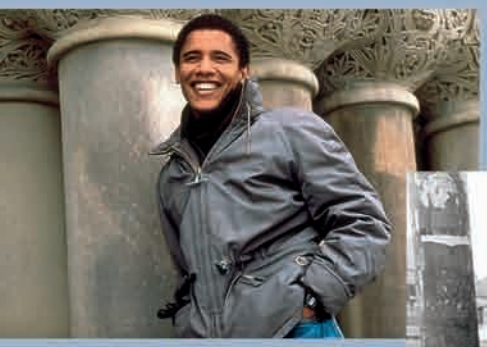
社会奉仕への使命感

自己のアイデンティティーと人生の目的を模索していたオバマは、1985年にニューヨークの国際コンサルティング会社の金融ライターという仕事を辞めてシカゴへ移り、サウスサイドの地元教会グループの地域社会活動家として働いた。サウスサイドは、アフリカ系米国人の住む貧困地域で、製造業の中心地からサービス業を基盤とする経済への移行によって大きな打撃を受けていた。

オバマは、何年も後に、大統領選への立候補表明演説で、「これまでの人生で最も役立つことを学び、キリスト教を信仰することの真の意義を知ったのは、ここサウスサイドです」と語っている。

彼は、経済再開発、職業訓練、環境浄化活動などの問題で住民に発言権を与え、この仕事で目に見える成果を上げた。しかし、地域社会活動家としての自らの一義的な役割は、政治的・経済的な権利拡大に向けて地域固有の戦略を構築するボトムアップの活動で、一般市民の動員を促すことである、と考えていた。

そうした活動を3年間続けた後、オバマは、そのように困窮した地域社会を真に改善するには、より高



マサチューセッツ州ボストンのハーバード大学法科大学院にて（1991年ころ）

シカゴで有権者登録活動に参加（1992年ころ）

1992年10月18日、ミシェル夫人と結婚

いレベルで法律と政治の分野に関与する必要がある、との結論に達した。そこで、ハーバード大学法科大学院に入学した。同大学院では、黒人として初めて、権威あるハーバード・ロー・レビュー誌の編集長に選ばれたこと、また1991年に優等で卒業したことで有名になった。

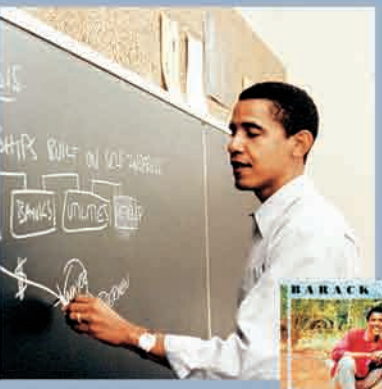
これだけの実績があれば、「オバマはどのような道にでも進むことができた」と、大統領選でオバマ陣営の選挙参謀を務めたデービッド・アクセルロッドは言う。オバマは、第2のふるさととなったシカゴに戻り、公民権法専門の弁護士として開業するとともに、シカゴ大学で憲法学を教えた。そして1992年に、同じくハーバード大学法科大学院を卒業したミシェル・ロビンソンと結婚し、ビル・クリントンをはじめとする民主党候補を応援するため、シカゴで有権者登録運動に従事した。

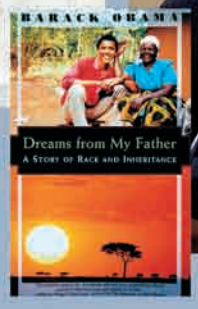
オバマは、社会に奉仕したいという強い気持ちを持ち続け、1996年に初めて公職に立候補することを決意し、シカゴからイリノイ州上院議員に選出された。この選挙は、いろいろな意味で、彼の地域社会活動家としての活動が発展したものであり、当然の流れであった。彼は、市民主導の草の根活動の推進者、そして広い支持基盤を持つ連合組織の構築者である政治家として、政治に対するビジョンにもそれまでと同じ幅広いものの見方を取り入れた。

当時オバマは、「白人、ラテン系、アジア系などすべての労働者に経済的な不安をもたらしている、より大きな経済的な力に対処せずに、人種差別だけを成功への障壁だとするアフリカ系米国人は、大きな考え違いをしている」と語った。それから8年間の州上院議員時代に、選挙資金制度改革、貧しい労働者のための減税、州の刑事司法制度の改善などの法律制定を成し遂げた。

全米デビュー

2000年に、オバマは初めて米国連邦議会選挙に出馬した。そしてシカゴ選出の現役民主党議員ボビー・ラッシュと下院の議席を争って敗れた。予備選挙でラッシュに大敗したことに落胆したオバマは、イリノイ州議会議員より大きな影響力を求め、政治家としての階段を上る最後





シカゴ大学法科大学院で憲法学を教える（1993年ころ）

1996年、シカゴ選出のイリノイ州上院議員に初当選。以来3回再選を果たした

2000年、連邦下院議員選挙で敗れ、家族と共に敗北宣言をするオバマ・イリノイ州上院議員

著書「Dreams from My Father」（1995年）

の賭けとして、「成功しなければ辞める」覚悟で連邦上院議員に立候補する決心をし、妻ミシェルを説得した。

2004年のイリノイ州の連邦上院議員選挙は、前年に現役の共和党上院議員ピーター・フィッツジェラルドが再出馬断念を発表していたため、混戦となっていた。民主党７人、共和党８人の候補が、各党の予備選挙で上院議員候補の指名を争ったが、オバマは、他の６人の民主党候補の合計を上回る得票数（53%）で楽勝し、民主党の指名を獲得した。

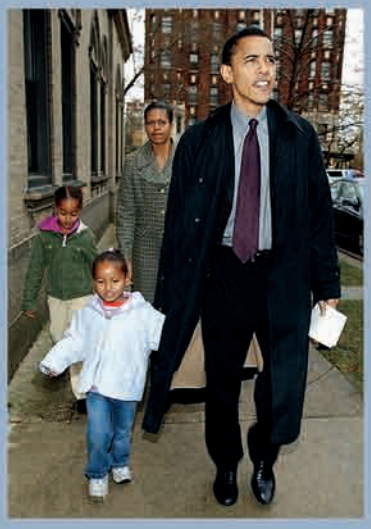
当時、連邦上院では、共和党が100議席中51議席を占め、かろうじて多数党となっていたが、民主党は11月の議会選挙で上院多数党の地位を回復するチャンスを高めるためには、イリノイ州の選挙が極めて重要であると見ていた（実際には、民主党が多数党となったのは2006年であった）。民主党全国大会でオバマに重要な役割を与えることで、彼の選挙運動を後押ししたいという思惑があったこと、オバマの演説の才能がよく知られていたこと、そしてオバマがすでに民主党大統領候補ジョン・ケリーに大変良い印象を与えていたことから、オバマは民主党大統領候補指名の党大会で、基調演説を行うという役割を与えられた。

高揚感のある洗練された言葉で、党派的な対立を超越する必要性を説き、不信感に基づく政治ではなく「希望に満ちた政治」を求めたオバマの演説の効果は、党大会の参加者を奮起させるにとどまらなかった。この演説によって、オバマは民主党の新星として一躍全米メディアのスポットライトを浴びることになったのである。同年秋の上院議員選挙で、彼は一般投票の70%を獲得して圧倒的な勝利を収めた。その年イリノイ州の共和党がほぼ全面的な混乱状態にあったことも、確かにオバマ大勝の一因だったが、彼が同州102郡中93郡を制し、２対1を超える比率で白人票を獲得したこと自体、目覚ましい出来事であった。

オバマは、従来の人種的対立を克服することのできる新しいタイプの政治家として、着実に評価を高めていった。ライターのウィリアム・フィネガンは、ニュー

2004年7月、
連邦上院議員に立候補

2004年7月27日、
連邦上院議員候補にすぎなかったにもかかわらず、
民主党全国大会で基調演説を行う



2004年の選挙日当日の
オバマとミシェル夫人、
娘のサーシャ（写真手前）と
マリア

ヨーカー誌に掲載されたオバマの紹介記事で、「話をしている相手の話し方にさりげなく合わせる」彼の才能を指摘し、オバマは「米国人が使うあらゆる言葉遣いで話すことができる」と書いた。オバマ自身は、自分が白人有権者と気持ちを通じさせることができる理由について、次のように説明している。

「私には白人のことがよく分かっています。祖父母が白人なのですから。(中略) 彼らの習慣、感性、善悪の判断などは、私には非常になじみ深いものです」

投票記録によると、オバマは上院で、民主党リベラル派の方針に沿った投票を行った。彼のトレードマークのひとつとなっているイラク戦争を批判する姿勢は、開戦前の2002年に行った演説にまでさかのぼる。その演説でオバマは、そのような軍事行動は、「信条ではなく政略」に基づくものとなる、と警告した。また、連邦議会の倫理規範の強化、退役軍人援助の向上、および再生可能燃料の利用拡大にも努めた。

大統領選出馬

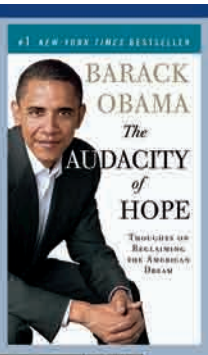
選挙戦が長期にわたり、50州で行われた予備選または党員集会がすべて意義を持った、2008年大統領選挙の民主党予備選は、いくつかの点で歴史的なものとなった。アフリカ系米国人や女性が立候補したことは以前にもあったが、今回は、2人の最有力候補が女性とアフリカ系米国人であった。2007年にバラク・オバマと他の7人の候補が、民主党大統領候補の指名を目指して選挙運動を始めた当時は、どの世論調査でも、ニューヨーク州選出上院議員ヒラリー・クリントンが最有力であり、オバマ候補は第2位となっていた。しかしながらオバマは、この選挙戦の初期に、特に若者の間で熱烈な支持者を得ることに成功し、全国的な草の根運動組織をつくるとともに、インターネットによる資金集めを行った。

クリントンはオバマより知名度が高く、その選対組織は問題なく機能し、州レベルで民主党指導層の支持を得ていたが、オバマ陣営は、クリントンのこうした利点を相殺する革新的な戦略として、代議員の選出を予備選

当時上院外交委員長を務めていたバイデン上院議員と

ケニアのコゲロ村で祖母サラ・フセイン・オバマと（2006年8月）

1998年の在ケニア米国大使館爆破事件の慰霊碑に花を手向けるオバマ一家（2006年8月）



著書「The Audacity of Hope」（2006年）

家族と共に大統領選出馬を宣言するオバマ（2007年2月）

ではなく党員集会で行う州に的を絞るとともに、従来は一般選挙で共和党に票を投じてきた小さい州に焦点を当てた。この戦略は、党大会に出席する各州の代議員の選出に当たり、各州で勝った候補にすべての、またはほとんどの代議員を割り当てる共和党方式ではなく、各候補の得票率にほぼ応じて代議員を割り当てる民主党の比例代表制を十分に活用したものであった。

この戦略は、2008年1月3日、全米に先駆けて行われたアイオワ州党員集会で効果を発揮し、オバマはクリントンを制して予想外の勝利を収めた。このアイオワ州での勝利が選挙の流れを変えた。ワシントン・ポスト紙が書いたように、「クリントンを破ったことで、(中略) オバマは彼女の最大のライバルとしての地位、すなわち最有力候補としてのクリントンに対抗するだけのメッセージと組織力と資金力を持つ唯一の候補としての地位を確立して、この選挙の流れを変えた」のである。

2月5日に22州で同時に行われた「スーパー・チューズデー」の予備選で、この戦略が再び功を奏し、オバマはクリントンとの戦いを同点に持ち込み、西部と南部の農村部の州では圧勝した。さらに、その後2月中に行われた10州の選挙でも、オバマはこの戦略で連勝して代議員数でのリードを確実にした。クリントンが代議員数でオバマに再び追い付くことはなかった。

オバマ大統領誕生

バラク・オバマは、最も若い米国大統領の1人である。1946 ～ 64年のベビーブーム世代の末期に生まれたオバマは、1980年代に成年に達した初めての大統領でもあり、そのこと自体が変化の予兆とも言える。彼の育った時代の雰囲気は、これより前のベビーブーマーの物の見方を形成した、社会的に騒然とした1960年代のものとは大きく異なっていた。はるかに年上の戦後世代の候補が争った2000年と2004年の大統領選について、オバマはかつて、「時として私は、ベビーブーム世代の心理劇、すなわち、何年も前に一部の大学のキャンパスで生まれた恨みや復讐（ふくしゅう）に根差した物語が、全国的な舞台で上演されるのを見ているような気分になった」と述べている。

ほかの6人の民主党大統領候補とテレビ討論会に参加したオバマ（写真右から3人目、2007年11月）

アイオワ州の小さな町ペオスタで選挙運動をするオバマ。2008年1月3日のアイオワ州党員集会ではオバマが勝利した

支持者とスーパーチューズデーの勝利を祝う（2008年2月5日）

最大のライバル、ヒラリー・クリントン上院議員との討論会に臨む

ニューヨーカー誌のラリサ・マクファーカーは、オバマが、明らかに従来の政治的な境界を超えて支持されていることについて、ひとつの持論を展開している。「オバマの投票記録は、上院でも有数のリベラルなものである。しかし、彼は常に共和党員にも受けがいい。それはおそらく、彼がリベラルな目標について保守的な言葉で語るからであろう」

さらにマクファーカーはこうも書いている。「歴史に対する見方、伝統を尊重する姿勢、世界を変えることはできるが、そのペースは非常にゆっくりとしたものになる、と懐疑的な態度を取っているという点で、オバマは極めて保守的である」

オバマ大統領は、米国政治に新天地を切り開いた。彼が立候補したのは、まさに多くの米国民が、米国は根本的な方向転換を必要としていると考えていた時だった。ワシントン・ポスト紙の政治コラムニスト、E・J・ディオンの次の文章は、オバマ候補の登場と米国の時代精神の偶然の一致を、端的に総括していると言えるかもしれない。

「時代の流れは、経験ではなく、変革を必要としていた。選挙演説で最も重要視されたのは、細部の知識ではなく、人々を夢中にさせることだった。単に古き良き時代に戻るのではなく、過去ときっぱり縁を切ることが、公約として最も高く評価されたのである」

2008年6月3日の集会でのオバマ夫妻。この日の予備選で勝利した結果、民主党全国大会での指名獲得に必要な数の代議員を確保することができた

選挙運動用の専用機内で記者と話すオバマ

民主党全国大会でのオバマ（写真右）、バイデン（同左）の正副大統領候補。中央はそれぞれの夫人たち（2008年8月28日）

オバマ大統領の将来へ

2007年4月23日にシカゴ国際問題評議会で行った「The American Moment(アメリカの時)」と題する講演からの抜粋

米国民を守ることこそ、すべての大統領にとって最も重要な責務です。そして同じように確信を持って言えることは、21世紀という時代に大統領の職務を効果的に果たす上で必要なのは、米国が発揮すべき指導力についての新しいビジョンと、国家安全保障に関する新たな構想である、ということです。過去の教訓から学びながらも、時代遅れの考え方に縛られないビジョンが必要です。

昨今のグローバル化した世界において、米国民の安全は、世界中のすべての人々の安全と切っても切り離せない状況にあります。中南米で民主主義を脅かす麻薬密売や汚職は、米国の問題でもあります。インドネシアの貧しい村人が、鳥インフルエンザに感染した鶏をやむを得ず市場に出荷しなければならない事態を、対岸の火事だと見過ごすことはできません。パキスタンの神学校で幼い子供たちが憎しみを教え込まれているときには、米国の子供たちも脅威にさらされることになります。

地球規模のテロであれ、世界的流行病であれ、劇的な気候変動であれ、大量破壊兵器の拡散であれ、21世紀の幕開けに私たちが直面している脅威は、もはや国境や境界線によって封じ込めることはできません。

＊＊＊＊＊

米国民の中には、国内にのみ目を向けて、国際問題での指導者という役割を返上したくなる人たちが数多くいるかもしれません。

しかしながら、そのような指導的立場の放棄は、米国が犯してはならない誤りであると、私は強く訴えます。米国は単独で21世紀の脅威に立ち向かうことはできません。しかし、世界もまた、米国なくしてその脅威に立ち向かうことはできないのです。米国は世界から退いてはなりませんし、また世界を強引に服従させようとしてもいけません。米国は行動し模範を示すことによって世界を先導しなければならないのです。

私たちは米国民の安全を確保し、すべての人々の安全を向上させるための21世紀型の軍隊をつくり上げることによって、指導的役割を果たさなければなりません。世界で最も危険な兵器の拡散を阻止するための地球規模の取り組みで先頭に立つことによって、指導的役割を果たさなければなりません。また共通の課題に取り組み、そして共通の脅威に打ち勝つために必要な協力関係と同盟を構築・強化することによって、指導的役割を果たさなければなりません。

のビジョン

そして米国は、世界の忘れ去られた片隅で、孤立した、絶望的な人生を送るすべての人々に手を差し伸べることによって、指導的役割を果たさなければなりません。なぜなら、憎しみに屈して、体に爆弾を巻きつける人間は必ずいますが、その一方で、それより何百万人も多くの人々が、別の道を選ぶことを望み、私たちの希望の光が彼らの行く手を照らすことを望んでいるからです。

米国は、狂人の行進から大陸を解放するために尽力した国です。また、分断された都市に住む勇敢な人々に、私たちもまたベルリン市民であることを伝えた国でもあります。世界各国で平和使節を務める若者を、何世代にもわたって送り出してきました。そして、壊滅的な被害を与えた津波の被災者のために、アジア全土に緊急援助を行った国でもあります。

私たちが指導力を発揮する時が来ました。私たちの世代が、新たな、素晴らしい米国の物語を語る時がやって来たのです。いつの日か、私たちは子供たちにこう伝えることができます。米国が中東和平を築くための貢献をしたのは、この時代なのだと。気候変動に立ち向かい、人類を滅ぼす危険のある兵器の拡散を防いだのも、この時代なのだと。世界の忘れ去られた片隅に生きる人々に機会を与えたのも、この時代なのだと。そして、何世代にもわたり、世界中からの疲れきった旅人たちを導き、米国に機会と自由と希望を見出させてきた米国をよみがえらせたのも、この時代なのだと。

写真：シカゴ国際問題評議会で講演するバラク・オバマ（2007年4月23日）

オバマ大統領の家族

2008年7月4日、モンタナ州ビュート市で独立記念日のパレードを楽しむオバマ一家。左からミシェル、サーシャ、バラク、マリア

オバマ夫妻と2人の娘たちは、ホワイトハウスの住人となる最初のアフリカ系米国人である。

バラク・オバマ大統領とミシェル夫人は、オバマ大統領選出の歴史的意義と、それが多くの米国人にとって何を意味するかを十分に理解している。ミシェル夫人は、サウスカロライナの美容院で出会った10歳の少女のことを、選挙運動中のスピーチでよく取り上げた。この少女はミシェル夫人に向かって、もしオバマ候補が大統領に選出されたら、「どんな自分も想像できるようになるわ」と言ったのである。

「私はこの少女に、幼いころの自分を見ました」と、ミシェル夫人はニューズウィーク誌で語った。「なぜなら、私がここにいること、このような立場になることは、本当ならあり得ないことだったからです。私は、統計的に見て特異な人間です。シカゴのサウスサイドで育った黒人の少女。そんな私がプリンストン大学へ入学すると誰が期待したでしょうか？（中略）ハーバードの法科大学院は私には手が届かないと言われました。それでも、私はハーバードに入って立派にやり遂げました。私は、このような立場になるはずではなかったのです」

ミシェル・ロビンソンは、イリノイ州シカゴの労働者階級の家庭に生まれ育った。父親は市の水道局に勤務する傍ら民主党の選挙区幹事を務め、母親は専業主婦としてミシェルと兄のクレイグを育てた。

ミシェルは熱心に学業に励み、プリンストン大学に進学、1985年に同大学を卒業した。アフリカ系米国人学を副専攻として社会学で学士号を取得した後、ハーバード大学の法科大学院に進んだ。

バラク・オバマとミシェル・ロビンソンは1989年、ミシェルがアソシエイト（勤務弁護士）として働いていたイリノイ州シカゴのシドリー＆オースティン法律事務所で出会った。ミシェルはそこで、夏季実習生として働くことになったオバマを指導する役割を任された。

未来の大統領は、シカゴで自分が行っていた地域活動の集会に参加してほしいとミシェルに頼み、彼女はその申し出を受けて集会に参加した。ミシェルがニューズウィーク誌に語ったところによると、オバマはこの集会で、「現実の世界とあるべき世界」の差を埋めることについて演説した。

２人はデートを重ね、1992年に結婚した。オバマ夫妻は社会奉仕に対する情熱を共有し、成人後の人生の大半にわたり公共部門で仕事をしてきた。

２人の出会いの場であった企業法務の法律事務所を辞めた後、ミシェル夫人はシカゴ市当局でいくつかの職に携わり、若者が社会奉仕の仕事に就くことを支援する組織「パブリック・アライズ」シカゴ支部で創設時の事務局長を務めた。最近ではシカゴ大学医療センターの地域・渉外担当副理事長を務めた。

「ミシェルは確かに、ホワイトハウスが用意する講演の機会をうまく活かすことができる人物のようです」歴史研究家で、ニュージャージー州のライダー大学でコミュニケーション学の教授を務めるマイラ・グーティン博士はこう語る。「ミシェルは聡明で、はっきりと意見を述べることができ、経営の経験もあります」

オバマ夫妻は、社会奉仕に対する２人の情熱、幅広い専門的経験と実績が、前途に待ち構えているさまざまな課題に取り組む助けとなってくれると期待している。大統領に

2008年８月25日、民主党全国大会でスピーチするミシェル・オバマ（写真上）。オバマ一家は選挙期間中ほとんど一緒に全米を移動してすごした（写真下）

なって世界に好ましい影響を与えたい、とバラク・オバマは望んでいるが、その陰には、２人の幼い娘、1998年生まれのマリアと、2001年生まれのサーシャ（ナターシャの愛称）の存在がある。マリアとサーシャは、ジミー・カーターが1976年に大統領に選出されたときに９歳だった娘のエイミー・カーター以来最年少のホワイトハウスの住人である。

「私の人生は２人の娘たちを中心に回っています」と、シカゴの教会で行った父の日の演説で、当時のオバマ上院議員は語った。「私が考えるのは、娘たちにどんな世界を残してやれるだろうか、ということです。すべての子供たちにより良い世界を残すために、自分に課せられた小さな役割を進んで果たさなければ、実りある人生とは言えないことに気付きました。これこそ、父親として、親としての、私たちの究極の責任です」

ジョゼフ・バイデン副大

民主党全国大会でのジョゼフ・バイデン副大統領候補（左）とバラク・オバマ大統領候補（2008年8月28日）

「バルカン半島での大虐殺の終結を促し、『女性に対する暴力法』の成立に貢献したことが、私の政治家としての人生で最も誇らしい瞬間だと思う」。これは、ジョゼフ・R・バイデン副大統領（当時上院議員）が2007年に出版した自伝「Promises to Keep: On Life and Politics（守るべき約束：人生と政治について）」の1節である。

自らをこのように評価するバイデンを理解するための鍵は、その生い立ちにある。バイデンはアイルランド系カトリック教徒で、1942年にペンシルベニア州北東部にある、労働者階級が多く住む都市スクラントンの、あまり裕福でない家庭に生まれた。母親は専業主婦で、父親は自動車販売の仕事をしていた。バイデンが10歳のときに一家はデラウェア州に移った。バイデンはニューヨーク州のシラキュース大学の法科大学院を卒業したが、家族の中で大学の学位を取得したのは彼が最初だった。

バイデンの政界における転換期は、1972年に29歳で初めてデラウェア州から連邦上院議員に選出された時だった。上院議員就任の宣誓の数週間前に、妻と娘を自動車事故で失ったのである。同じくこの事故に巻き込まれた2人の幼い息子は、命を取り留めたものの重傷を負った（バイデンは1977年に再婚し、娘を1人もうけた）。1988年にも、さらなる不幸に見舞われた。脳に2カ所、命にかかわる可能性がある動脈瘤（りゅう）があると診断されたのだ。回復には時間がかかり、苦痛が伴った。議会を7カ月欠席したが、その間ほとんど寝た切りの状態だった。

統領

バイデンが上院議員時代に残した投票記録は、ほとんどがリベラルなものである。共和党議員らにも好感を持たれ、党派を超えた活動をしていたが、大方は民主党を支持してきた。例えば、ワシントン・ポスト紙によれば、上院議員としての最後の２年間にバイデンが投じた票のうち、96.6%は民主党支持の投票だった。マイケル・ゴードンは、ニューヨーク・タイムズ紙上でバイデンを評して「リベラルな考え方を持った国際主義者として広く知られている。外交の必要性を強調したが、時には軍事圧力を使うことも辞さなかった」と書いた。

バイデンは、上院での最初の数年間、国内問題に的を絞り、特に市民の自由、法の執行、公民権に力を注いだ。1975年には司法委員会の委員となり、1987年から1995年まで同委員会の委員長を務めた。この時期の立法面における彼の最も意義のある功績は、彼が起草した画期的な「女性に対する暴力法」の制定（1994年）である。この法律では、性に起因する犯罪に取り組むために、連邦資金から数十億ドルを拠出している。しかし時として型通りのリベラル的思考に同調しないこともあった。一例を挙げると、薬物関連の犯罪に対してより厳しい量刑を科す法律を強く支持する立場を取った。また、公民権を推進する姿勢を強く打ち出す一方で、人種融和を促すための強制バス通学（編集部注：白人と黒人の生徒を同じ学校で学ばせるために、学区を越えて生徒をバスで通学させること）に反対した。

外交姿勢

バイデンは上院議員として、外交問題で活躍した。1975年から、大きな影響力を持つ上院外交委員会の委員となり、2001年から2003年まで同委員会の委員長を務めた。さらに2007年に再び同委員長になり2009年まで務めることになっていた。2004年に上院議員に選出されたバラク・オバマは外交委員に任命された。そして共に働いたことによりバイデンをよく知るようになった。オバマは、かつてバイデンが委員長であったヨーロッパ小委員会の委員長を務めた。しかしながら、ある重要な外交政策において、オバマとバイデンは意見を異にした。米国によるイラク侵攻を承認する上院の最終決議案についてバイデンは賛成票を投じたが、オバマは（当時まだ上院議員ではなかったが）反対を表明したのである。

しかし、最終決議案の投票の前に、バイデンはインディアナ州選出の共和党リチャード・ルーガー上院議員と共に、外交努力を尽くした後にのみ軍事行動を承認する決議案

バイデン上院議員（着席右端）と上院司法委員会の委員たち（1986年8月）

を採択させようとした。この決議案が否決された後、バイデンは戦争を承認する法案に賛成票を投じたが、ブッシュ政権がイラク侵攻に先立ち、さらなる承認を得なければならないとする修正案には反対票を投じた。2005年に、バイデンは、イラク侵攻に賛成票を投じたことを「間違い」だったと表明した。オバマがバイデンを副大統領候補に指名した後、イリノイ州スプリングフィールドで行った共同会見で、オバマはバイデンを「外交政策の専門家であり、その心情と価値観は中流階級にしっかりと根差している」と評した。また、「大きな影響力を持つ、ブッシュ - マケイン外交の批評家であるとともに、テロリストとの戦いを新たな方向へ導き、イラク戦争を責任ある終結へと向かわせることを支持する発言者である」とも語った。

パキスタンのイスラマバードで会見する（左から）ジョン・ケリー、ジョゼフ・バイデン、チャールズ・ヘーゲルの各上院議員（2008年2月）

上院外交委員時代には、バイデンは広く世界各国を訪れ、多くの外国の首脳のみならず、ナンバーツーや側近、さらには反対派勢力の指導者とも親密な関係を築いた。手がけた重要問題には、軍縮、核拡散、北大西洋条約機構（NATO）の拡大、超大国の対立、そして米国と第3世界との関係などがある。またグローバル・エイズ・イニシアチブを強力に推進するとともに、炭素など温暖化ガスの排出を抑制するための国際的な取り組みを早くから支持してきた（20年前に初めて、気候変動対策法を起草している）。また、自由貿易協定をおおむね支持してきた。長く上院議員を務めているバイデンは、特にアフリカ問題にも深い関心を寄せている。南アフリカのアパルトヘイト制度には早くから批判的であった。ダルフール問題に関しては、殺りくに歯止めをかけるために、より厳しい行動を取ることを支持してきた。

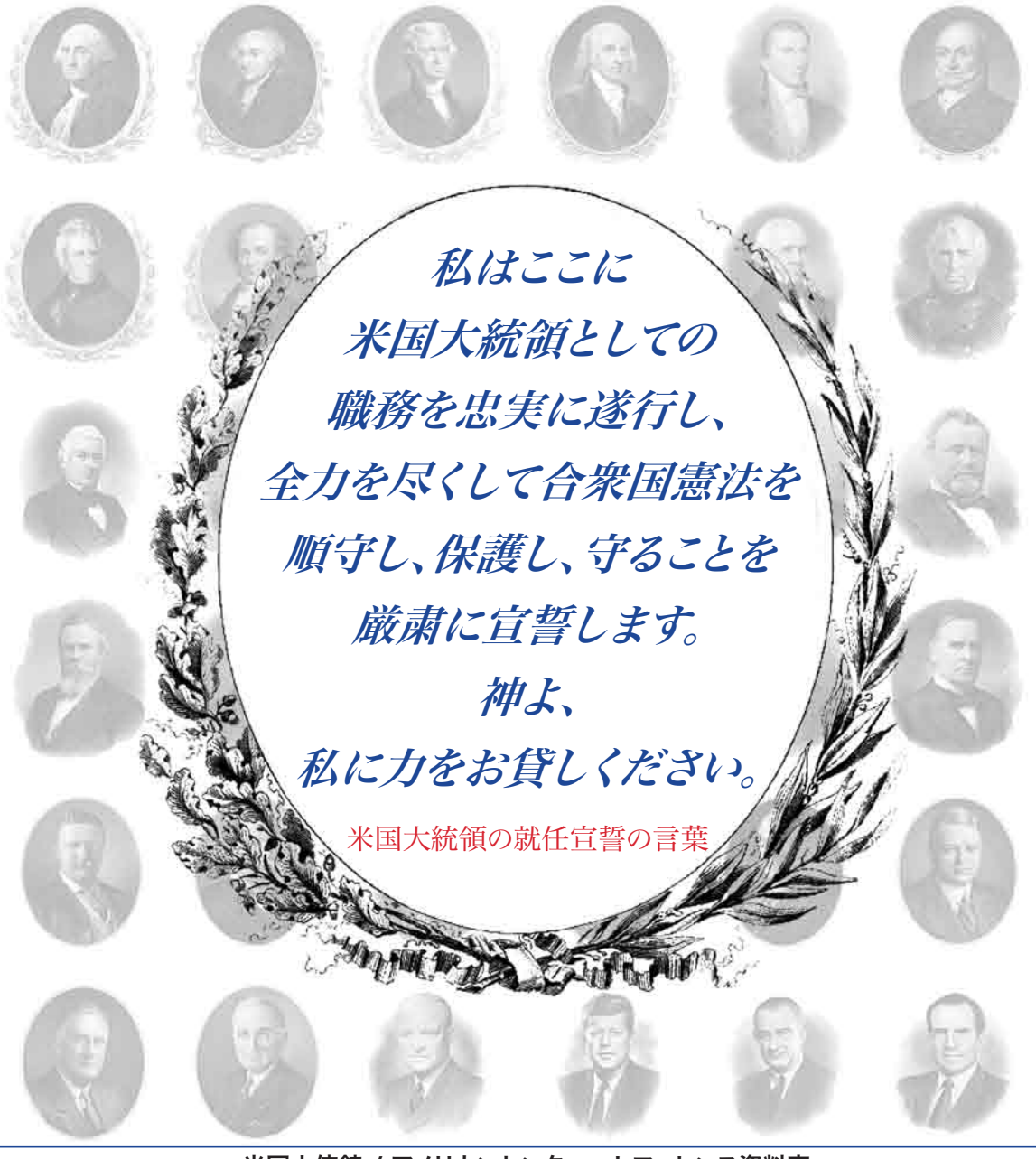
バイデンの最も意義のある外交政策上の功績は、1990年代にバルカン半島で起きた紛争を解決するために尽力したことである、というのが大筋の見方である。セルビア人指導者のスロボダン・ミロシェビッチに対抗して行動を起こすようクリントン政権に強く働きかけたのが、バイデンだったと言われている。スプリングフィールドの会見で、オバマはバイデンが「バルカン半島での殺りくを終結するための政策の策定に貢献した」と語った。バイデンは、とりわけボスニアのイスラム教徒に対する民族浄化を阻止するために介入すべきであることを強く訴えた。その後は、セルビアをコソボから撤退させるためのNATO軍の空爆を支持した。

バイデンは1988年と2008年の2回、大統領に立候補したが、いずれも撤退した。オバマ陣営によると、バイデンを副大統領候補に選んだ理由は数多くあるが、特に彼の外交政策に関する専門知識と経験を挙げた。バイデンは米国史上初のカトリック系副大統領であり、また初めてのデラウェア州出身の副大統領でもある。

写真 *- 後述の写真を除くすべては©AP Images。表紙の写真はバラク・オバマ上院議員事務所提供。表紙・裏表紙の挿入写真は、米国財務省証券・印刷局提供。4ページ左の写真は、Time & Life Pictures/Getty Images 提供。*
製作 *- 発行責任者　George Clack　編集主幹　Anita N. Green　製作協力　Domenick DiPasquale, David Pitts, Kelly Bronk　編集長　Rosalie Targonski　デザイナー　Tim Brown　写真編集　Ann Monroe Jacobs*
編集・発行 *- 米国大使館レファレンス資料室（2009年発行・2011年11月再版）*

本号の日本語文書は参考のための仮翻訳であり、正文は英文です。

Printed in Japan



米国大使館 / アメリカンセンター・レファレンス資料室

札幌アメリカンセンター・レファレンス資料室
〒064-0821　札幌市中央区北1条西28丁目　米国総領事館内
Tel：011-641-3444　Fax：011-641-0911

米国大使館レファレンス資料室
〒107-8420　東京都港区赤坂1–10–5
Tel：03-3224-5292　（レファレンスサービス）
Tel：03-3224-5293　（来館予約）
Fax：03-3505-4769

名古屋アメリカンセンター・レファレンス資料室
〒450-0001　名古屋市中村区那古野1–47–1　名古屋国際センタービル6階
Tel：052-581-8641　Fax：052-561-7215

関西アメリカンセンター・レファレンス資料室
〒530-8543　大阪市北区西天満2–11–5　米国総領事館ビル6階
Tel：06-6315-5970　Fax：06-6315-5980

福岡アメリカン・センター・レファレンス資料室
〒810-0001　福岡市中央区天神2–2–67　ソラリア・パークサイドビル8階
Tel：092-733-0246　Fax：092-716-6152

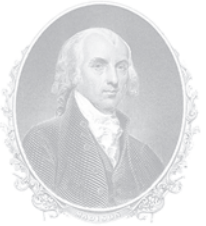
米国大使館のウェブサイト

米国大使館　http://japanese.japan.usembassy.gov
米国大使館携帯サイト　http://usembassy.jp/

George Washington

John Adams

Thomas Jefferson


James Madison

James Monroe

John Quincy Adams

Andrew Jackson

Martin Van Buren

William Henry Harrison

John Tyler

James Polk

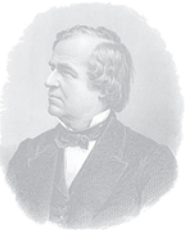
Zachary Taylor

Millard Fillmore

Franklin Pierce

James Buchanan

Abraham Lincoln


Andrew Johnson

Ulysses S. Grant

Rutherford B. Hayes

James Garfield

Chester Arthur

Grover Cleveland

Benjamin Harrison

William McKinley

Theodore Roosevelt

William Taft

Woodrow Wilson

Warren G. Harding

Calvin Coolidge

Herbert Hoover

Franklin D. Roosevelt

Harry Truman

Dwight Eisenhower

John F. Kennedy

Lyndon B. Johnson

Richard Nixon

Gerald Ford

Jimmy Carter

Ronald Reagan

George H.W. Bush

William J. Clinton

George Walker Bush